

## 後期における魯迅の民衆像に関するノート（下）

### 关于鲁迅后期的民众观之札记（下）

中井政喜

Masaki NAKAI

1. はじめに
2. 前期における民衆像
3. 後期における民衆像
  - 3.1 マルクス主義文芸理論から見る民衆像（上）（ここまで前々号）
  - 3.2 後期における現実の民衆像（中）（ここまで前号）
    - 3.2.2 後期における特徴的な民衆像（下）（以下今号）
4. さいごに

### 3.2.2 後期における特徴的な民衆像

ここでは、1925、26年ころに現れはじめた、大石の下に抑圧されてきた民衆、農民革命軍として立ちあがる農民（前述の「俄文訳本『阿Q正伝』序及著者自叙伝略」〈1925・5・26、『集外集』〉、「学界的三魂」〈1926・1・24、『華蓋集続編』〉における民衆・農民）を継承発展させるものとして、後期における、マルクス主義文芸理論に基づいて明確に特徴的に現れる民衆像をとりあげる。

#### （1）自分の利害と見識によって立ち上がる民衆

時の政治権力の理不尽な圧制に対して、或いは上に立つ者の理不尽な抑圧

に対して、或いは帝国主義の侵略に対して、抗議し反抗して戦う民衆像が描かれる。

魯迅は「〈題未定〉草（9）」（1935・12・19、『且介亭雜文二集』）で次のように言う。

「ここで言うのは魏忠賢〔明末に権力を握った宦官〕が捕り手を差し向けて周順昌を捕らえさせようとしたとき、蘇州の人民に撃退されたことである。まことに庶民は書物を読んでいないし、歴史や法律も知らず、玉に瑕を求めたり、糞に道理を探すことが分らない。しかしそのおおよそから見て、黒白を明らかにし、是非を区別することができる。それはしばしばものごとに通じた孤高の士大夫がほとんど及びうところではないものがある。いま、今日の『大美晩報』を受けると、『北京特約通信』があり、次のように記す。学生がデモ行進をして、警察は消火用ホースで水を浴びせ、棍棒で殴り刀で切りつけ、一部分の学生は城外に閉めだされて、飢えと寒さに襲われた。『このとき燕冀中学、師大附中および付近の住民が次々に慰勞隊を組織し、水、焼餅、饅頭等の食物を差し入れ、学生は餓えをほぼしのいだ……』中国の庶民は凡愚だと誰が言ったのだろうか。現在まで愚弄され欺かれ抑圧されてきたが、しかしなおこのようにものごとを理解している。」（「〈題未定〉草（9）」）

魯迅は前期において、中国国民性の墮落を指摘して、その病根を目先の事に目をつけることと「卑怯」「貪欲」等をあげた。また、小説等（「復讐」「長明灯」等）において、目覚めぬ麻痺する民衆のありさまを描写し批判した。しかし後期の「〈題未定〉草（9）」（1935・12・19、前掲）において魯迅は、中国の民衆が世の中の事態、ものごとを理解していることを指摘する。中国の民衆はこれまで愚弄され欺かれ抑圧されてきたが、しかし1935年12月9日、「停止内戦、一致抗日」等を要求する一二・九運動の学生デモにおいて、警察によって弾圧され城外に閉め出された学生のために、民衆等が食物の差し入れをし、学生の窮状を救ったことを言う。魯迅は、民衆が凡愚ではないと述べる。

また、魯迅は「沙」（1933・8・15、筆名洛文、『南腔北調集』）で次のように言う。

「近頃の読書人はいつも、中国人が散砂のようであって、考えるべき方法もないと慨嘆し、運の悪い責任をみんなに帰している。実際これは大部分の中国人に無実の罪を着せるものだ。民衆〔小民、原文〕は無学であり、事を見るのに不明ではあるかもしれないけれども、しかし自身の利害にかかわることを知るとき、団結しえないであろうか。以前には役所の前で焼香しての訴え、蜂起、謀反があった。現在でも請願の類がある。彼らが砂のようであるのは、支配者によってうまく治められたのである。」（「沙」）

1933年に魯迅は、民衆が必ずしも散砂でないとする。民衆は自身の利害にかかわるとき、実際に行動して、共同で請願し、蜂起し、謀反<sup>1</sup>したとする。そして現在でも民衆の請願の類が存在するとする。<sup>2</sup>

魯迅は、日本帝国主義による東北三省の占領に関して、「田軍作『八月的郷村』序」（1935・3・28、『且介亭雜文二集』）で次のように言う。

「エレンブルグ（Ilia Ehrenburg）はフランスの上流社会の文学者を論じたあとで、次のように言う。このほかにもなお異なった人たちがいる。『教授たちは黙々と彼らの書斎で仕事をしている。X線療法を実験する医師は彼らの職務で亡くなる。身を奮って自分の仲間を救おうとする漁夫はひそかに大海に沈む。……一方では荘厳な仕事があり、他方では荒淫と無恥がある。』

この最後の二句は、まことに現在の中国を述べているかのようだ。」（「田軍作『八月的郷村』序」）

「人民が進歩したのか、それとも時代が大変近くて、事実がまだ埋没していないためか分からないが、私は東三省の占領されたことに関する事情を述べる数篇の小説を読んだ。この『八月的郷村』は、そのうちの大変良い一冊である。短篇の連続に近いところがあり、構成と人物描写の手段も、ファージェューエフの『壊滅』に較べられない。しかしまじめな緊張した作者の心血と、失われた空、土地、受難の人民、そして失われた生い茂る草、コウリヤン、キリギリス、蚊が、一团になって、鮮紅のものが読者の眼前に展開し、中国の一部と全部、現在と未来、死路と活路を示している。」（同上）

「<sup>そう</sup>宋はかつて道学によって金と元のために心を治め、<sup>きん げん</sup>明はかつて党獄によって満清のために口をつぐませた。この本は当然満洲帝国に許されない、しか

し私はこのために当然中華民国にも許されないと思う。(中略)

良い本がなぜむしろ中華民国に許されないのか。それは当然、上ですでに数回述べた――

『一方では荘嚴な仕事があり、他方では荒淫と無恥がある。』(同上)

小説『八月的郷村』は、日本帝国主義によって東北三省が占領され、東北人民が塗炭の苦しみ陥り、義勇軍が苦しい戦いを続けることを告発する。しかしその本は南京国民政府に許されないことを言う。それは、一方、東北人民(民衆)等の「荘嚴な仕事」が存在するのに対して、他方、南京国民政府の支配層の「荒淫と無恥」や言論の抑圧があるためであることを示唆し批判する。

## (2) 中国階級社会のなかの民衆像

魯迅は、階級社会のなかで、民衆が支配階級に対してどのように見ているのか、民衆がこの階級社会のなかでどのように生活を営んでいるのか、について述べる。

魯迅は「現代支那に於ける孔子様」(1935・4・29、『改造』1935年6月号)<sup>3</sup>で、一般の庶民が孔子をどのように見ているかについて次のように言う(原文は日本語、ルビは中井による)。

「なるほど成程一県毎に聖廟即ち文廟ぶんびよう〔孔子をまつる廟〕なるものある事はあるがそれは実に寂寞な冷落な有様で一般の庶民は決して敬礼しには行かない、行くなれば仏寺か神廟である。若し百姓などに孔子様はどんな人かと問へば彼等は無  
論聖人だと答へるが併しそれは権力者のちくおんき蓄音機にすぎない。」「(現代支那に於ける孔子様)」

「つま語り孔子様は支那に於いては権力者達によってかつぎ上げられ、其の権力者や権力者にならう企を持つ人達の聖人で、一般の民衆とは頗る縁の遠いものである。併しその権力者達も聖廟に対しては矢張り一時的熱心に過ぎない。孔子を尊ぶ時にもう別な目的を持って居たのだから達成すればその道具は無論無用になり失敗すればもう一層無用になるわけである。」(同上)

一般の庶民は文廟(孔子廟)には行かない。なぜなら孔子は権力者によって

担ぎだされているもので、庶民には関係がないからであるとする。

「支那に於ける一般の民衆、殊に所謂<sup>いわゆ</sup>愚民なるものは孔子様を聖人だと云ふが聖人と感じない、彼に対してはつつしむが親しまない。併し自分はどうも支那の愚民ほど孔子様を了解するものは世の中にあるまいと思ふ。成程<sup>なるほど</sup>孔子様は大変な国を治める方法を考案した、併しそれは皆な民衆を治めるものの、即ち権力者達の為めの考案で民衆其者の為めに工夫した事が一向ない、『礼<sup>しよじん</sup>庶人に下らず』である。権力者<sup>だけ</sup>達丈の聖人になり遂に『敲門磚<sup>こうもんせん</sup>〔門を叩くれんが、出世のための手段〕』になっても仕方がない。」（同上）

孔子の教えは、権力者が民衆を治めるためのことで、民衆自身のためではなかったとする。

「〔孔子は〕民衆とは相互に関係がないとは言へないが何んと親しみもないと云ふなら恐らく先づ大に讓歩<sup>おおい</sup>した言方<sup>いいかた</sup>であらう。その何等の親しみもない聖人に近付いて行かないのは寧ろ<sup>むし</sup>当たり前の事で何時でもよいから試みに檻樓<sup>ぼろ</sup>と泥足<sup>どろあし</sup>で大成殿<sup>たいせいでん</sup>へ登って御覧なさい、誤って上海の上等な活動写真館や一等電車へ迷込<sup>まよこ</sup>んだ時の様に、直ちに叱飛ば<sup>しかり</sup>されるのであらう。それは旦那様のものだちゃんと心得<sup>こころえ</sup>て居るので『愚民』だっても左様な莫迦<sup>さようば</sup>までには未だなり切<sup>いま</sup>って居ないのであった。」（同上）

「愚民」といえども、孔子が旦那様のものであることを、「愚民」は体験から身にしみて理解していると言う。魯迅は、孔子に対する被支配者（民衆）と支配者（権勢者）の見方をはっきりと区別し、孔子が権勢者のために統治の方法を工夫したものであり、民衆も孔子を旦那様のものとして見なして親しまないことを指摘する。

また魯迅は「談金聖嘆〔金聖嘆について〕」（1933・5・31、『南腔北調集』）で次のように言う。

「庶民はもとより流賊を恐れる、また〈流官〉も大変恐れる。たしか民国元年の革命以後、私は故郷にいて、どういうわけか県知事がしばしば交代した。交代するたびに、農民たちは心配し苦しんでお互いに言いあった。『どうしたらよいのか。また腹を空かしたアヒルに変わった。』彼らは今にいたっても『欲<sup>たに</sup>の壑は埋めがたい』という古い教訓を知らないけれども、『成せば王と

なり、敗るれば賊となる』という成語を大変よく理解していた。賊とは、流れている王であり、王とは、流れない賊である。もし簡単に言うなら、それは〈坐寇<sup>ざこう</sup>〉である。中国の庶民はこれまで〈蟻民<sup>ぎみん</sup>〉を自称した。いま喩えに便利のように、しばらく牛に昇格しよう。鉄騎がひとたび過ぎれば、肉を食い散らし、骨が散らばることになる。もしも避けることができれば、彼らはもちろん避けたい。しかしもしも彼らが雑草をかじり、かろうじて余命を保ち、乳を搾りだして、これらの〈坐寇〉を充分に養い、そののちに彼らがやや鯨飲馬食することがないのならば、彼らは天の恵みと思う。区別するのはただ、〈流〉と〈坐〉だけで、〈寇〉と〈王〉にはない。試みに明末の野史<sup>みんやし</sup>を見てみると、北京の民心の不安は、李自成<sup>りじせい</sup>が入京したときは、彼が出京したときほどひどくはなかった。」(『談金聖嘆』)

中国における、支配者(王や寇)と被支配者(民衆)の関係は、搾取者と被搾取者の関係であることを言う。搾取者が、官であるか賊であるかにかかわらない。魯迅は四川省の民謡を引用し、現在の搾取者に租界と外国銀行(植民地支配と国際金融資本の帝国主義勢力)をつけ加える。この状況から庶民はどのように抜けだすことができるのだろうか。

「事実がこれらに、わずかに残された道を教えている以上、当然、彼ら〔民衆〕に自分の力量に思いいたらせるであろう。」(『談金聖嘆』)

魯迅は、この社会構造と支配体制を改革するためには、被支配者、被搾取者の民衆が自らの力量に目覚めなければならないし、事実が民衆をして自分の力量に思いいたらせるであろうとする。

また、魯迅は「『論語一年』」(1933・8・23、『南腔北調集』)でバーナード・ショウについて次のように言う。

「彼〔バーナード・ショウ〕は彼ら〔紳士淑女〕を登場させ、仮面と立派な衣装を引き裂き、最後に耳を引っばって、みんなに指し示して言う。『見てみなさい、これは蛆虫だ。』相談する時間、隠蔽する方法さえも、少しも人に与えない。このとき、笑うことができるのは、ただ彼の指摘する病痛がない下等人だけである。この点において、ショウは下等人と近いもので、上等人とは遠い。」(『論語一年』)

「最も猛烈にその主人たちを鞭打ったのはバーナード・ショウであり、われわれ中国の紳士淑女たちも彼をまたひどく憎んでいる。」（同上）

ここで魯迅は、上等人（紳士淑女）と下等人とを区別し、バーナード・ショウが上等人の偽善と仮面を引き裂いたとする。上等人と下等人という構造のなかで、魯迅の批判の矛先は、上等人（支配層）に向いている。

また、魯迅は「<sup>か か かん</sup>中国人的生命圈」（1933・4・10、筆名何家干、『偽自由書』）で次のように言う。

「あれこれ考えて、〈生命圈〉に思いついた。これはすなわち、〈奥地〔腹地、原文〕〉でもなく、〈辺境〉でもなく、両者の間に介在して、ちょうど環、圈の在りどころのようで、ここで『×世に性命をкаろうじてながらえる』ことができるかもしれない。

〈辺境〉では飛行機が爆弾を落とす。日本の新聞によれば、〈<sup>へいひ</sup>兵匪<sup>せんめつ</sup>〉を殲滅していると言う。中国の新聞によれば、人民を殺戮し、村落商店街が瓦礫と化したと言う。〈奥地〉でも飛行機が爆弾を落とす。上海の新聞によれば、〈<sup>きようひ</sup>共匪〉を殲滅しており、彼らはめっちゃくちゃに爆撃されたと言う。〈共匪〉の新聞でどう言っているのか、私たちはまったく分からない。しかし要するに、辺境では爆撃、爆撃、爆撃である。奥地でも爆撃、爆撃、爆撃である。一方では他人が爆撃しつつ、一方では自分で爆撃する。爆撃手は違うが、爆撃されるのは一つである。ただこの両者の間に、爆弾が誤って落ちてこないものでありさえすれば、〈血肉が吹っ飛ぶ〉ことをまぬがれる希望がある。だから私はこれを、〈中国人の生命圈〉と名づける。

外からさらに爆撃が入ってくるなら、この〈生命圈〉は収縮して〈生命線〉となる。さらに爆撃が入ってきて、すっかり爆撃された〈奥地〉にみんなが逃げこむなら、この〈生命圈〉は終わり、〈<sup>ぜろ</sup>生命〇〉となる。」（「<sup>ぜろ</sup>中国人的生命圈」）

「しかしこの話は、金持ちたちはそうとは考えない。なぜなら彼らには飛行機があるし、なお彼らの〈外国〉がある。」（同上）

日本帝国主義による辺境爆撃と侵略、南京国民政府による共産党根拠地（奥地）の爆撃が行なわれ、その間で中国民衆の生命圈がおびやかされている

る。日本帝国主義の爆撃と侵略が内に広がれば、民衆の生命圏は縮小し、民衆は〈奥地〉に逃げこむほかになく、生命圏はなくなる。しかし中国の金持ちたちには、別に自分たちの飛行機があり、自分たちの行ける安全圏「外国」があるとする。

当時の日本帝国主義の中国侵略と、南京国民政府の「先安内、後攘外（先に内を安んじ、後に外を攘<sup>はら</sup>う）」政策による中国共産党根拠地に対する包圍殲滅攻撃によって、人民の生活がおびやかされ縮小することを批判的に諷刺する。ここでも、被支配層・民衆の生命の危険と、そうした民衆に危険をもたらしながら、自らは脅威を避ける手段をもつ支配層・金持ちたちの存在が指摘される。

魯迅は、前述のように1925年26年ころ「灯下漫筆」（『墳』）等で中国旧社会について、連珠のように連なる封建的な身分階層のなかで、上から下へと抑圧の下降する社会構造が存在しつつ、同時に大きく支配階層と被支配階層の二つに分離する社会構造を指摘して、社会批判をおこなった。1933年のここでは、日本帝国主義の中国侵略と、南京国民政府による中国共産党根拠地に対する包圍殲滅攻撃という、具体的な歴史的社会的背景のもとに、自分の安全手段をもつ南京国民政府の支配層・金持ちたちと「生命圏<sup>ぜろ</sup>〇」にいたる可能性のある被支配層・民衆を論じている。ここでは社会批判を行なう場合、いっそう具体的現実的な社会的政治的状况に基づいて分析を行ない、社会科学に（史的唯物論に基づいて）分析を深化させていることが分かり、批判の矛先はより明確に南京国民政府の支配層・金持ちたちに向けられている。

### （3）文化面における民衆の清新さ

魯迅は、文芸面における、読書人の旧文学にはない民衆の清新さ剛健さを指摘する。

魯迅は「門外文談」（『自由談』、1934・8・24～9・10、筆名華<sup>か</sup>園<sup>ぎょ</sup>、『且介亭雜文』）で、前期の雜文には言及されたことのない、こうした民衆の一面について、次のように言う。

「さらに一つは〔大衆語の採用によって〕文学の低落を心配することがある。

大衆はまったく旧文学の修養がなく、士大夫しだいふの文学の細やかさと較べて、或いはいわゆる〈低落〉を見せるかもしれない。しかし旧文学の痼疾に染まっていず、そのためこれはまた剛健で、清新である。無名氏の文学、たとえば『子夜歌』の類いは、旧文学に新しい力を与えたのだらう。これに私は先にすでに言及した。現在も或る人は多くの民歌や物語を紹介している。またなお演劇があり、例えば『朝花夕拾』で引いた『目連救母』のなかの無常鬼むじようきの自叙で、無常鬼が或る鬼魂きこん〔亡魂〕に同情したため、半日しばらく生きかえらせて、この世に帰したが、はからずも閻魔王に処罰された。このことから二度とは好き勝手にはさせまいとする――

『たとえおまえが銅城鉄壁であれ、

たとえおまえが皇族国戚であれ！……』

なんと人情があり、またなんと罪咎を知り、なんと法を守り、またいかにきっぱりとしていることだろうか。私たちの文学者が創りだすことができるだろうか。

これは真の農民と手工業者の作品であり、彼らが閑暇のなかで演ずるものである。』（「門外文談」）

このように魯迅は、『目連救母』のなかで、民衆によって創りだされた無常鬼の唱う歌の清新さと剛健さを指摘する。

また、魯迅は「略論梅蘭芳及其他（上）」（1934・11・5、筆名張沛ちようはい、『花辺文学』）で次のように言う。

「彼〔梅蘭芳ばいらんほう、京劇の俳優〕が士大夫の手助けを受けていないときに行なった芝居は、もちろん俗で、ひいては野卑で、うす汚かったが、しかしはつらつとして、生気があった。〈天女〉に化して、高貴になってみると、しかしここから活気がなくなり、憐れなほどぎこちがなくなった。死にもせず生きもしない天女や林黛玉りんたいぎよくを見ると、私が思うに、大多数の人はむしろきれいで活動的な村の女を見ていたほうがいい、彼女は我々と近いと考えるだらう。』（「略論梅蘭芳及其他（上）」）

梅蘭芳（1894－1961）が、士大夫の手助けを借りる前に演じた芝居のなかの女性は、俗で野卑で、うす汚かったにしろ、はつらつとして、生気があっ

たとする。それは庶民の芸術だったとする。

また、読書人が文言文の簡潔さを推奨し、白話文や大衆の言葉の饒舌さを主張するのに対して、<sup>4</sup> 魯迅はその比較の欺瞞を、「〈大雪紛飛〉」(1934・8・24、筆名張沛、『花辺文学』)で次のように指摘する。

「或る人が学校から社会の上層へと移った場合、思想や言語はともに一步一步と大衆から離れる。それは当然『勢いとしてまぬがれない』ことである。しかし彼がもしも小さいときから公子や坊ちゃんではなく、かつていくらかは〈下等人〉と関わりがあるならば、ふり返って少し考えれば、必ずや文言文或いは白話文に勝る多くの良い言葉があったことを覚えているであろう。もしも自分で醜惡なことを作りだして、彼の敵対者の良くないことを証明するならば、大衆に恥ずかしい思いをさせることができず、大衆を笑わせることができるだけである。大衆は知識の程度が読書人ほど高くないけれども、しかし彼らはでたらめを言う人たちに対しては、一つの呼び名がある、刺繍の枕である。この意味は、ただ田舎の人が分かるだけだろう、なぜなら貧乏人が枕に詰めるのは、アヒルの羽毛ではなく、稲わらであるから。」(「〈大雪紛飛〉」)

読書人が意図的な操作をして、大衆の言葉をおとしめようとする行為に比較して、ここでは大衆の言葉に対する魯迅の信頼の厚さが分かり、また魯迅が大衆の素朴さ、知性を高く評価していることが分かる。

「大衆について言えば、その境界線は広範であり、そのなかにはさまざまな人を含んでいる。しかしたとえ〈一つも字を知らない〉文盲であっても、私から見れば、実際決して読書人の推測するようなほど愚鈍ではない。」(「門外文談」)

魯迅は、文学面において、読書人の旧文学にはない民衆の清新さ、剛健さを指摘し、また梅蘭芳の演技においては、民衆とともにあったときの、俗で野卑ではあるけれども、生き生きとし、はつらつとした演技を高く評価した。また、民衆の言葉を擁護し、その素朴さと知性を高く評価していると言える。

#### （4）上海の民衆像

魯迅は『『且介亭雜文』附記』（1935・12・30）で次のように言う。

「私たちはこのような場所に生き、私たちはこのような時代に生きている。」  
（『『且介亭雜文』附記』）

魯迅は後期において、日本帝国主義の侵略が進行していた中国における上海、帝国主義列強の支配する租界が存在した租界都市上海という、「このような場所」に生きた。また魯迅は、帝国主義列強の支配する植民地・租界が存在し、南京国民政府による圧制が行なわれる半植民地半封建的中国のなかの、上海の1920年代末、30年代という、「このような時代」に生きていた。<sup>5</sup>

魯迅は、1930年代の租界都市上海という歴史的社会的環境のなかで、租界という特徴的な社会構造と統治体制のもとで生活する民衆の、前期とは異なる様々な類型の民衆を見ることになった。<sup>6</sup>

##### ①外国人の下属と、四億の標的

魯迅は「〈抄靶子〉」（1933・6・16、筆名<sup>りょじゅん</sup>旅隼、『准風月談』）で次のように言う。

「もし人がよく租界の道を歩くのなら、ときには制服を着た数人の同胞と一人の異胞（しばしばこの人はいない）がピストルで人を指しながら、全身と持ち物を検査することに出遭うだろう。」（『〈抄靶子〉』）

上海では、これを「抄靶子〔標的を捜査する〕』と呼ぶ。

「抄は、捜すことである、靶子は銃で撃つはずのものである。私は一昨年9月〔1931年9月の満州事変〕以来、はじめてこの名前の正しさを知った。四億の標的は、文明最古の場所に列べられ、内心に僥倖であることはただ、まだ撃たれていないことだけである。洋大人の部下は、実に彼の同胞たちに絶好の名称を与えた。」（同上）

外国人の支配する租界で、制服を着た同胞の巡査は、中国人を「靶子〔標的〕』と言う。中国人の置かれた位置は、いつ射撃されるかもしれない四億の標的であるという。

魯迅は「電影的教訓」（1933・9・11、筆名<sup>じゅぎゅう</sup>孺牛、『准風月談』）で、上海の支配構造を象徴的に次のように言う。

「私が上海で映画を見るときには、とくに〈下等華人〉になっていた。階上に白人と金持ちが坐っており、階下には中等と下等の〈華夏の後裔〉が並んでいるのが見えた。銀幕上で白人の兵士たちが戦い、白人の旦那が金もうけし、白人のお嬢さんが結婚し、白人の英雄が探検するのを見た。観客を感心させ、羨ましがらせ、恐怖させ、自分ではできないことと思わせた。」(「電影的教訓」)

映画館では、上海を支配する白人と金持ち(高等華人も含まれる)が階上に陣どり、階下に中等華人と下等華人が並んだ。

魯迅は「推〔推す〕」(1933・6・8、筆名豊之余、『准風月談』)で一つの事件を紹介する。上海の路面電車で、新聞売りの子供が電車の踏み台から新聞代金を受けとろうとし、誤って人の服(長衫)の端を踏んだため、押しのけられて倒れ、動きだしていた電車にひかれて亡くなった。推した人はとくに立ち去った。長い中国服を着ているのは、「高等華人」でなければ、上等華人であるはずだと言う。

また上海の路上で、縦横無尽に突き進んで、決して譲らない二種類の人物がいるという。それは、あたかも無人の境地を行き、長い足で人を踏みつけるように進む「洋大人」と、サソリのように両手を曲げて、人を一路推していき、推された人が泥水に転ぼうとかまわない上等華人である。

「乗車し、入口から入り、切符を買い、手紙を送るのに、彼は推す。門を出て、下車し、禍を避け、難を逃れるのに、彼はまた推す。推して女や子供がよろけ、転んだら、彼は生きている人の上から踏み越える。転んで死んだら、死人の上から踏み越える。」(「推」)

上等華人の彼は何も感じない。魯迅は租界の支配者、外国人の横暴、それと結託し、同胞を踏みつける高等華人、上等華人の横暴をよく理解していた。

また、「踢〔ける〕」(1933・8・10、筆名豊之余、『准風月談』)ではロシア人巡査が夕涼みする市民(ペンキ職人)を賭博人と誤解し、黄浦江に蹴落とし落命させ、止めようとした中国人友人も推されて黄浦江に落とされたことを言う。

「たとえ埠頭で夕涼みをするとしても、理由もなく蹴られて、命を落とすかも

しれない。黄浦江に落ちるのである。友だちを救おうとし、凶悪な相手を止めようとしても、『手で推されて』、やはり黄浦江に落ちる。もしもみんなが助けようとするなら、〈反帝〉の嫌疑がかかる。〈反帝〉はもともとまだ中国では禁止されていない、しかし〈反動分子が機に乗じて騒乱する〉のをあらかじめ防がなくてはならない、だから結果はやはり〈蹴る〉と〈推す〉をまぬがれることができず、つまり結局黄浦江に落ちる。』（「踢」）

魯迅は、香港を経由して上海に向かう途次、1927年9月28日に香港で荷物の検査を受けた。そのときのことについて「再談香港」（1927・9・29、『而已集』）で次のように言う。

「香港はただ一つの島にすぎないけれども、中国の多くの場所の現在と将来の小図像を活写している。中央には外国人の主人がいて、手下は徳を人に讃えられる若干の〈高等華人〉と、手先となる一団の奴隸根性的な同胞〔奴気同胞、原文〕である。このほかはすべて黙々と苦しむ〈土人〉であり、耐えることができるものは洋場〔租界〕で死に、耐えることができないものは深山に逃げこむ、<sup>びょうぞくようぞく</sup>苗族瑶族が私たちの先輩である。』（「再談香港」）<sup>7</sup>

こうした植民地都市香港の状況は、租界都市上海の状況を示唆するものであったと思われる。魯迅は、「我々中国人は、もともと古来から『自分で足を滑らせ水に落ちる』ものであった。』（「踢」）と言及する。ここでは、不抵抗政策に抗議する学生デモ隊を南京国民政府が弾圧し、一部の学生が川に落とされたときの、政府の釈明が使用されている。この「踢」（前出）には租界当局による横暴な統治状況に対する抗議とともに、それを許容する南京国民政府に対する抗議の意思がこめられていると思われる。

## ②外国人の<sup>せいさいそう</sup>下屬の西崽相

上記の外国人主人の「手先となる一団の奴隸根性的な同胞」（「再談香港」）とは、どのような同胞として描かれているのだろうか。その一つに<sup>せいさい</sup>「西崽」がある。西崽は、租界都市上海で外国人の雇用する使用人の中国人男性を指す。

「西崽の厭わしいところはその職業にあるのではなく、彼の『西崽相』にあ

る。ここのいわゆる『相』とは、相貌を言うのではなく、『中に誠なれば、外に現る』もので、『形式』と『内容』を含めて言う。この『相』とは次のようなものである。外国人の勢力が多数の中国人よりも強い。自分は外国語が分かり、外国人に近い、だからまた多くの中国人よりも上だと考える。しかし自分は、また黄帝の出自であり、古い文明を有し、中国の事情に精通していて、毛唐〔洋鬼子、原文〕よりも優れている。だから多数の中国人より勢力が強い外国人に比べても優れている。このために外国人の下にいる多数の中国人よりもいっそう優れている、とする。」(『題未定草』(2))、1935・6・10、『且介亭雜文二集』)

外国人の支配下における租界都市上海に、その使用人西崽が出現した<sup>8</sup>。魯迅は、没落した古国人民の租界における精神的特徴は、帝国主義に征服されているがゆえに外国人におもねり、同時に四千年の歴史と文化のあることによって自らを驕<sup>おご</sup>ろうとするとところにあるとする。<sup>9</sup>

魯迅は「〈揩油〉」(1933・8・14、筆名韋索、『准風月談』)で次のように言う。

「〈上前をはねる〔揩油、原文〕〉とは、奴隸根性の人〔奴才、原文〕の品行のすべてを説明している。(中略)

上海で、もしも巡查〔原文、巡捕〕、門衛、西崽と雑談するならば、彼らはいたい毛唐を憎んでいる。彼らは多く愛国主義者である。しかし彼らはまた毛唐と同じように、中国人を輕蔑し、その棍棒とげんこつと輕蔑のまなざしが、もっぱら中国人に注がれる。

〈上前をはねる〉生活には福がある。この手段がさらに展開し、この品格が高尚になり、この行為は正当であると考えられて、これは国民の技量であり、そして帝国主義に対する復讐であると見なされるだろう。あけすけに言うならば、実際、いわゆる〈高等華人〉なるものも、この範型を脱却できているだろうか。」(「〈揩油〉」)

魯迅は、後期において、前期とは異なり、「奴才」と「奴隸」を区別するようになった。<sup>10</sup> 奴才は、自らの奴隸状態に満足し、そこから上前をはね、また奴隸を鞭打って監督する。奴隸の方は、自らの奴隸状態に反抗し、そこか

ら逃れようとし、戦う。しかし失敗して、手かせ足かせをつけられることにもなる。そして魯迅は、上海における外国人と高等華人を取りまく同胞の手下どもに奴才を見ており、さらにその手段がやや高尚になったものが高等華人の奴才であることを指摘する。

こうした奴才の「揩油」の精神と、抵抗を秘めた奴隷の精神を同一視することはできない。また、それらを前期におけるような「国民性」の悪の一つ、奴隷根性（「阿Q正伝」におけるような身分階層制のなかの奴隷根性と、精神勝利法）とも同一視することはできない。<sup>11</sup> 奴隷と奴才は、まさしく上海のような租界都市の支配構造の圧制が中国人にもたらす典型的な二つの精神構造、すなわち帝国主義と南京国民政府の圧制が中国人にもたらす、二つの対照的な面をもつ精神構造であったと思われる。

そして魯迅は、高等華人と外国人の横暴な踏みつけが、すなわちこのような支配体制が、租界都市上海ばかりでなく、中国のすべての下等華人を踏みつけるまでに拡大していくであろうと危惧したと思われる。

### ③封建的な身分階層制が崩壊したのち

1925、26年ころ、中国人は封建的な身分階層社会のなかで、すなわち人々が食い同時に食われる、苦しみ同時に苦しめられる、抑圧の下降する連珠のような社会構造のなかで、身動きができない社会状態にある、と魯迅は考えた。

しかし帝国主義の支配する租界都市上海では、第一次世界大戦（1914～1918）ころ以降に民族資本の軽工業が勃興し、日本資本の軽工業が進出して、資本主義的要素が拡大した。1930年代においては、上海のさまざまな分野において封建的身分階層制の束縛がある程度において崩壊していたと思われる。そこに、民衆の新しいさまざまな、資本主義的要素の気風が、労働者階級の気風も含めて、出現していたと思われる。

魯迅は「爬和撞」（1933・8・16、筆名荀繼、『准風月談』）で次のように言う。

「かつて梁実秋教授は言ったことがある、貧乏人は這う、<sup>りようじつしゅう</sup>這いあがる、富豪<sup>は</sup>

の地位にまで這わなければならない。」「〔爬和撞〕〕

貧乏人ばかりでなく、奴隷も這いあがろうとする。彼らは苦悩の運命を背負いながら、懸命に働き、奮闘し這いあがろうとする。しかし道は狭く、人は多く、大部分は這いあがれない。敵は上にいるのではなく、そばにいると思う。失望したものは、当たろうとする。人に当たり、くじに当たって、この苦境を乗り越えようとする。しかしそれはできずに、また這い、当たろうとし、また当たらずに這う、こうして疲労困憊し、死んでのちに止む。

これは当時の半植民地半封建社会において、租界都市上海におけるように封建的身分階層制が崩壊しつつあり、資本主義的要素が拡大するなかで、貧乏人と奴隷が少しずつ身動きがとれ、流動するようになって、彼らが富を求めて苦闘する生活を描写したものと言える。

魯迅は「〈靠天吃飯〉」（1935・7・1、筆名姜珂<sup>きょうか</sup>、『且介亭雜文二集』）で次のように言う。

「おそらく西洋人の言ったことであろう、世界で貧乏人の分け前があるのは、日光と空気と水だけだ、と。これは現在の上海では適用できない。心身を働かせてかせぐ労働者〔売心売力的、原文〕は一日夜まで閉じこめられ、彼は日光にあたることができず、よい空気を吸うことができない。水道を引くことができないものは、きれいな水を飲むことができない。」（「〈靠天吃飯〉」）  
魯迅は、上海における労働者たちの過酷な労働条件をよく知っていたと思われる。

しかし上海にはこうした過酷な道から外れて、与太者のように遊んで暮らすものもいた。魯迅は「吃白相飯」（1933・6・26、筆名旅隼、『准風月談』）で次のように言う。

「〈吃白相飯〉については、それはやはり文言で『正業に就かず、遊蕩を生計とする〔不務正業、游蕩為生〕』と言ったほうが、他郷の人には比較的理解できる。」（「〈吃白相飯〉」）

彼らは、第一に巧妙にペテンを使い、相手のものを巻きあげる。第二に、それがうまくいかないときには、威圧に転じて、相手のものを巻きあげる。第三に、遁走する。

上記のように、封建的な身分的階層社会が崩壊しつつあった上海のような租界都市では、資本主義的要素が社会に浸透し、さまざまな類型の民衆が出現したことが分かる。魯迅は、こうした類型の民衆に対して、微妙な評言をつけている場合がある。例えば、「〈吃白相飯〉する人はむしろ自ずから敬すべきところがある。彼はそれでも率直に人に言うのである、『吃白相飯』をしている、と。」「（『吃白相飯』）」それゆえに、こうした類型の民衆に対して魯迅に批判の気持ちがあったとは言えないが、しかしその主たる批判の矛先は、上述のように、こうした類型の民衆を生みだす歴史的社会的条件のほうに、帝国主義と南京国民政府に支配された租界都市の資本主義の浸透する社会のゆがんだ諸条件のほうに、民衆をこのような隘路に導く歴史的社会的諸条件のほうに、向けられていたと私には思われる。

「私たちはこのような場所に生き、私たちはこのような時代に生きている。」（『且介亭雜文』附記）

#### （4）社会的政治的情况と後期の民衆像

後期における魯迅が、さまざまな問題を自由に考察し発表する言論の自由は、南京国民政府の圧制のもとで基本的に存在しなかった。そのため、その民衆像とその関連する諸問題も、魯迅の諸作品のなかで様々な筆名で、鋭い諷刺を用いながら、暗示的に示され、示唆されるに止まるが多かった。上の事情に加え、魯迅は、南京国民政府の圧制のもとで、1930年に逮捕令の申請が出された等のこともあり、上海から自由に出ることが難しくなっていく。魯迅は上海の租界地域に閉じこめられる場合が多く、実際の中国の広い社会状況を、そして各地の民衆の状況を、全体的に自分の目で把握し確認することが難しかったと思われる。<sup>12</sup> 魯迅が直接的に目にしたり、新聞紙上等で知る事情は、限られたものであった。それゆえに、魯迅によって知られる事情は細片で、多様な形で現れたと思われる。ただ、中国変革に関わる、社会科学上の、マルクス主義文芸理論上の民衆に関わる根本的な確信（「新興の無産階級だけに将来がある」〈『二心集』序言〉、1932・4・30）は揺るぎなかったと思われる。またたとえ新聞の記事の上であれ、マルクス主義文芸理

論に基づく魯迅の信頼と確信を事実として支える、中国の民衆の姿も、上述のように現れた（『〈題未定〉草（9）』、1935・12・19）。

後期における魯迅は、マルクス主義文芸理論を受容して以降、1930年代はじめころに、社会主義をめざす過渡期のソ連の存在とその経済的発展の現状を肯定していくようになった（『林克多『蘇俄聞見録』序』、1932・4・20、『南腔北調集』）。また中国社会を資本主義の存在する階級社会として社会科学的に把握することによって、労働者階級に将来を託す希望をもつことができた。将来における中国改革の方向を、魯迅は後期において自分なりに見定めることができた。魯迅は、マルクス主義文芸理論による確信に基づき、労働者や農民階層のために、木刻版画、連環画の普及、ラテン化文字の提案等の啓蒙運動に一知識人として尽力したといえる。

こうした情況において、後期の魯迅の民衆像のなかには、民衆のなかで、民衆とともに、民衆のために奮闘する確固とした軸となる中国人の存在、「筋骨きんこつと背骨せぼね〔筋骨和脊梁〕」の存在があった。<sup>13</sup>

「私たちには古来、専心して懸命かたくに働く人、必死に頑かたくに行なう人、民衆のために援助を求めた人、身を捨てて法を求めた人がいた、……帝王宰相のために家譜を作ったのに等しい『正史』ではあるけれども、往々にして彼らの輝きを覆い隠すことができない。これが中国の背骨である。

この類いの人たちは、たとえ現在においても少なくなったと言えるであろうか。彼らには確信があり、自分を欺さない。彼らは、先人が倒れ、後人がそれを越えて続く戦いをしている。彼らは、ただ他方でいつも踏みにじられ、抹殺され、暗黒のなかに消滅しているので、みんなに知られることができないのにすぎない。中国人が自信を失ったというのは、一部分の人を指すことはできる。もしも全体に言うのならば、それはほとんど中傷である。

中国人を論ずるなら、表面にぬった自他を欺くおもしろいに欺されずに、その筋骨と背骨を見なければならない。自信の有無は、状元宰相じようげんさいしやうの文章は根拠とするに足りないもので、自分で地の底を見なければならない。」（『中国人失掉自信力了嗎』、1934・9・25、『且介亭雜文』）

魯迅は、1930年代半ばころにおいて、ソ連という社会主義をめざす過渡期

の国、労働者農民の支配する国、その存在とその経済的成功があり、また延安等の根拠地で苦闘する中国共産党の存在があり、他方で、列強の帝国主義（とりわけ日本帝国主義）の侵略と南京国民政府の圧制がある、という諸条件のなかにあった。この諸条件のなかで、中国の筋骨と背骨となって奮闘する中国人（民衆と知識人）によって、新しい中国社会は労働者農民が主体となって実現する可能性がある、と魯迅は信じたと思われる。魯迅は、この方向に向けて、知識人としての自らの一臂の力でともに戦い、尽力しようとしたのだと思われる。「筋骨と背骨」の中国人像は、後期に現れた新たな民衆像、知識人像と言える。<sup>14</sup>

## 4. さいごに

### 4.1 前期民衆像の継承と変容について

辛亥革命挫折以後、特に中期において、魯迅は中国改革の根本的な課題が国民性の改革（思想革命）にあると指摘した。そのとき魯迅はあたかも国民性が第一動因であるかのようにして、とりわけ民衆の階層に現れる国民性の悪を批判した。それは、魯迅の「個人的無治主義」の憤激の心情（シェヴィリョフ的心情）に基づいて、すなわち辛亥革命の挫折体験をした改革者としての旧社会全体に対する憤激の心情に基づいて、目覚めぬ麻痺した民衆を「愚民」として批判するものとして現れた。

しかし1925年、26年ころの魯迅は、「大石の下に」生育してきた、すなわち封建的旧社会の巨大な抑圧の下に生活してきた民衆に対する弁護の姿勢を見せ、また過去の王朝での農民の反乱軍に対する農民革命軍という位置づけへの賛意も見せた。

また、『人道主義』と『個人的無治主義』という二つの思想の起伏消長（『魯迅景宋通信集』二四、1925・5・30）の一環としてあった民衆像、「素朴な民」像と愚民像は、魯迅が「個人的無治主義」から脱却するにともない、その枠組みの制約から解放されていき、1926年、故郷の、あるがままの民衆像（『朝花夕拾』）、まっとうな生活を営む中国の民衆像の回想と確認と探究へと向かった。

## 4.2 後期民衆像の種々相と魯迅の姿勢

後期において、1928年4月の「太平歌訣」(1928・4・10)、「鏟共大観」(1928・4・10)は、民衆の階層に国民性の悪が具現する前期の愚民像を、改めて呈示した最末尾の文章であったと思われる。しかしこの場合、これは挫折体験した改革者の憤激の心情による民衆批判と言うよりは、むしろ革命文学論争のなかで、激しい魯迅批判を行っていた中国革命文学派が、あまりにも楽天的な民衆像をもち、中国旧社会の暗黒の現状を直視しない態度をとっていることを批判する点に重点があったものと思われる。

1929年ころ以降、国民性に対する魯迅の位置づけは、マルクス主義文芸理論と本格的に接触していくなかで、基本的にプレハーノフの国民性に関する考察を習得し、それに基づくものとなった。すなわち国民性は歴史的諸条件、社会的構造の所産であり、したがって国民性は第一動因ではないとした。この基本的見解の基礎の上に、魯迅は1929年ころ以降、中国人の国民性に関する議論および民衆観を改めて展開していると思われる。

すなわち後期の1929年ころ以降において、民衆階層や支配階層に現れる国民性が議論される場合、国民性は歴史的諸条件、社会的構造の所産としての社会現象として指摘された。すなわち国民性は、長期にわたる王朝の封建的社会の所産、また清朝の異民族による苛酷な支配の所産として、或いはその後の中国の半植民地半封建社会という階級社会のもとで、政治的には列強の帝国主義の侵略と抑圧、軍閥政府・南京国民政府の圧制という諸条件のもとで、こうした一連の歴史的社会的関連、政治的関連のもとで出現する、社会現象として議論されるようになった。

魯迅の後期の作品中に現れる民衆像は、上の事情を基本的に踏まえたうえで解釈すべきと思われる。すなわち魯迅の後期の作品中に現れる民衆像は、中国の半植民地半封建社会という階級社会に生きる民衆像として、また租界都市上海の条件下に生きる民衆像として、多岐にわたり複雑な様相を見せたと言える。それは、前期における民衆像を継承しつつ変容した、或いは継承発展した民衆像、或いは改めて史的唯物論のもとに認識された歴史的社会的条件下(上海の租界都市)で目にした民衆像であり、或いは将来の中国変革

の「筋骨と背骨」として希望を抱いた民衆像である。

以下に、後期におけるこうしたさまざまな民衆像と魯迅の姿勢についてまとめておくことにする。

第一に、後期の魯迅の民衆像は、1920年代末以降の、中国社会の複雑さを反映するものであったと思われる。当時の中国社会には、資本主義的要素があり、また植民地・租界における列強の帝国主義の植民地支配的要素、農村における封建的身分階層の要素等、さまざまな要素があった。それらの諸要素を背景として現れる社会現象としての民衆像は、多様であり、後期の魯迅における民衆像の種々相はその反映であったと思われる。

第二に、後期の魯迅は、こうした民衆の種々相を評価する場合、そして民衆の階層における諸問題（国民性の問題を含めて）を取りあげる場合、ほとんどの場合、半植民地半封建社会における支配層と被支配層、搾取者と被搾取者という階級社会の構造のなかでの社会現象として言及した。それゆえ魯迅の批判の矛先は、民衆階層の種々相自体の欠陥にあるよりも、半植民地半封建社会の支配層、搾取者層に向いていた。言い換えれば、批判の矛先は軍閥政府・南京国民政府の圧制、列強の帝国主義の侵略と支配の在り方のほうに向いていた。

第三に、それゆえ後期の民衆像は、たとえあたかも中期の愚民の行為のように（〈「愚民」の系譜〉として）立ち現れる事実が存在したとしても（例えば、「迎神和咬人」、1934・8・22）、半植民地半封建社会の中で出現した社会現象の一つとして新たに位置づけられ解釈され、魯迅の批判の矛先はむしろ社会的政治的責任を負うべき支配層・搾取者層に主として向けられた。

またもう一つの「素朴な民」の系譜は、前期の作品「祝福」（1924・2・7、『彷徨』）のなかで祥林嫂が封建社会の抑圧のなかで破滅して以後、それを受け継ぐものとして、たとえば後期において中国の郷村のなかの「指のつめをまだ赤く染めていない」（『写于深夜里』、1936・4・4、『且介亭雜文末編』）女性に言及された。この「素朴な民」の系譜はむしろ回想のなかで、中期においては『朝花夕拾』のなかで、後期においては晩年の「女吊」等のなかで、現実社会の故郷における庶民の生き生きとしたありのままの具体的な姿の探

求のなかに溶解していったと思われる。

言い換えると、魯迅のマルクス主義文芸理論（その基礎の一つとしての史的唯物論）に基づく変革主体の確信を、心の根の部分で支えたものの一つに、上述の、中期より以来彼の心の根を支えてきた、まっとうな生活を営む紹興の庶民（「無常」や「女吊」に現れる庶民等）の存在、知識人（范愛農、最初の師父、戦う章太炎等）の存在があった、と思われる。

第四に、後期における魯迅は民衆の知性の高さに言及し（『〈大雪紛飛〉』、1934・8・24）、その文学における反映としての清新さ、剛健さを認めた（『門外文談』、1934）。また、世の中の動向を見るときの、民衆の判断の正しさにも言及した（『〈題未定〉草（9）』、1935・12・19）。

第五に、中国の「筋骨と背骨」として、帝国主義の侵略と南京国民政府の圧制に対して戦う中国人像（民衆像、知識人像）がある。その中には、社会主義をめざす過渡期の、労働者農民の国ソ連の存在と、その5カ年計画による経済的成功という事実によって、魯迅が確信と期待をもった新興の労働者階級という民衆像をも含むものであった。

第六に、魯迅の深層心理には次のような中国の未来図に対する恐怖感もあった可能性がある。前述のように、魯迅は「再談香港」（1927・9・29、『而已集』）で次のように言った。中国の未来図は、中央に外国人の主人がいて、手下は徳を人に讃えられる若干の「高等華人」と、手先となる一団の奴隷根性的な同胞（奴気同胞、原文）である。このほかはすべて黙々と苦しむ「土人」（下等華人）であり、耐えることができるものは租界で死に、耐えることができないものは深山に逃げこむ。<sup>びようぞくようぞく</sup>苗族瑶族が先輩であるとした。おそらく後期の魯迅は、日本帝国主義の東北侵略が行なわれ、南京国民政府の支配層高等華人が無抵抗の姿勢を示すなかで、こうした未来図の恐怖を租界都市上海においてひしひしと感じていたと思われる。それは可能性として存在した、中国民衆の不幸な未来図であった。

以上のようなさまざまな後期の民衆像の基底に共通するのは、マルクス主義文芸論（史的唯物論）にもとづく当時の中国の歴史的社会的諸条件に対する魯迅の認識、中国の社会的構造を支配する、南京国民政府の圧制と列強の

帝国主義（とりわけ日本帝国主義）の侵略に対する魯迅の批判である。

言い換えれば、以上に言及したこれらの後期の民衆像は、魯迅自身が中国の改革を求め、南京国民政府の圧制と、列強の帝国主義の侵略に抵抗し反抗してねばり強く戦う、一中国知識人としての立場から考察した民衆像の諸側面であったと思われる。

## 注

- 1 前述のように、「学界的三魂」（1926・1・24、『華蓋集続編』）において、歴史上の農民の一揆は実質上、農民革命軍の蜂起とされた。「沙」（1933・8・15）の発言は、この民衆像を発展させたものであると言える。
- 2 魯迅は、尤炳圻宛て書簡（1936・3・4、『魯迅全集』第13巻、1981）で次のように言う。「日本人の国民性は、確かに良いものです。しかし最大の天恵は、蒙古の侵入を受けていないことです。私たちは大陸に生まれ、早くに農業を営み、ついには遊牧民の害をつぎつぎと受けました。歴史上血痕に満ちておりますが、今日までもちこたえてきましたのは、実際偉大なことです。しかし私たちはなお自分の欠点をあばかなければなりません、その意図は復興にあり、改善にあります……」  
ここで魯迅は、国民性の存在を認めている。そして魯迅は、中国社会の歴史的社会的諸条件をあげ、国民性はその所産であるとしたうえで（第一動因ではないとしたうえで）、現在の中国人の国民性の問題を取りあげていると思われる。
- 3 この文章の引用は『魯迅日文作品集』（上海文芸出版社、1981・5、第1版、1993年5月、第2次印刷）による。
- 4 李焯生は、「大雪紛飛」という文言の言い方が、白話に直した場合の「大雪一片一片紛紛的下着」に比べてはるかに簡要で趣のある表現であるとする。魯迅はそれに対して、『水滸伝』の白話から「那雪正下得緊」の表現を指摘し、文言より二文字多いだけで、しかもこのほうがはるかに「趣がある」とする。
- 5 1920年代、30年代の中国の労働者、そして労働する子供たちが、いかに過酷な状況にあったかの一端が、「第4章 工業」（『中国の発見——長い歩み』、ボーヴォワール著、内山敏、大岡信訳、紀伊國屋書店、1966・9・30）に述べられている。
- 6 1930年代当時の上海で、外国人の使用人女中を勤める阿金を取りあげた作品、「阿金」（1934・12・21、『且介亭雜文』）については、「魯迅『阿金』覚え書——魯迅の民衆像・知識人像覚え書（4）」（『名古屋大学中国語学文学論集』第23輯〈今鷹真先生喜寿記念号〉、名古屋大学中国語学文学会、2011・12、のちに『魯迅後期試探』〈名古屋外国語大学出版会、2016・10・20〉の第3章として所収）で取りあげたことがあり、小論では触れないことにする。この小論は結論部分で次のように論じた。①「阿金」（1934・12・21）の語り手（魯迅）の意図は、主として1930年代における租界都市上海の社会構造に対する告発であった。（それは、そうした状況を許容する南京国民政府に対する批判を同時に意味し、また南京国民政府による言論抑圧〈検閲〉、圧制に対する批判が表現されている。）②

1930年代の租界都市上海で外国人に雇われる下層社会における女性阿金の存在・行動に対する、魯迅の新しい認識と批判（国民性の問題に連結する批判、しかし第一動因としてではない批判）が語られた。そしてこの新しい認識は語り手自身（魯迅）の観念論的理想主義（旧社会の下層階層の女性がいいつも犠牲者・弱者である）に対する内省を促した。

- <sup>7</sup> 魯迅は、1927年1月にも、厦門から広州への途次に香港を通過し、香港の中国人税関吏の行為を見たこと、あるいはその後香港の新聞で読んだ記事の内容等に基づいて、将来の中国社会像を次のように予想する。ただ、ここでは、租界都市上海を例とする。

「ほかのところは知りませんので、上海によって類推するしかありません。上海では、もっとも権勢をもつものが一群の外国人であり、彼らに近づき取りまくものは中国の商人といわゆる知識をもつ人です。その輪の外は多くの中国の苦しむ人々であります。すなわち奴隷根性をもった下層の人々です。将来、もしも古い調子をなお歌い続けるならば、上海の状況は全国に拡大し、苦しむ人々は多くなることでしょう。」（『老調子已經唱完』、1927・2・19、『集外集拾遺』）

『魯迅年譜』第2巻（人民文学出版社、1983・4）によれば、魯迅は1927年1月17日、厦門から広州への途次、香港を通る。同年2月17日、香港へ出かけ、講演をする。「無声之中国」（1927・2・18、『三閑集』）、「老調子已經唱完」（1927・2・19、『集外集拾遺』）は、その時の講演である。

- <sup>8</sup> 魯迅は「現今的新文学的概観」（『未名』第2巻第8期、1929・4・25、『三閑集』）で次のように言う。

「上海の租界、その情況は、外国人が中央におり、その外側に、一群の通訳、密偵、巡查、西崽……の類がいて、外国語が分かり、租界の章程を熟知している。この圏外が、多くの庶民である。

庶民は租界に来ると、いつも本当の情況を理解できない。外国人が『Yes』と言えば、通訳者は『彼がびんたを食らわせろと言っている』と言う。外国人が『No』と言えば、通訳されるのは、彼が『銃殺しろ』と言っていることになる。」

- <sup>9</sup> 魯迅は「『現代電影与有産階級』訳者附記」（1930・1・16、『二心集』）で次のように言う。「説明する精神〔上海電影公会の書簡における〕は、一言でいえば、我々蒙古王の子孫は、たとえ国内がいかに戦争をし、混乱しているとしても、外国人の大人（たいじん）に対してはきわめて礼儀正しいものである。この一点だけである。

これはまさしく服従させられた古国人民の精神である、とりわけ租界におけるそれである。服従させられたために、自ら無力と観じ、人に依頼して世界に宣伝してもらうはかなく、いささかおもねるところをまぬがれない。しかしまた自らは『四千余年の歴史文化の訓練をへている』ものだと思うために、なお人に依頼して世界に宣伝できると考える、だから依然としていささか驕るところがある。驕りとおもねりがもつれ合ったものが、没落した古国人民の精神の特徴である。」

- <sup>10</sup> 魯迅は奴才と奴隷の違いについて、「“題未定”草（5）」（1935・8・16、『且介亭雜文二集』）で次のように言う。

「張露薇先生もちろん知識階層である、彼は同じ階層のなかにこうした多くの奴隷を見つけたし、鞭をもって打つ。私は彼の心情を理解する。しかし彼と彼のいわゆる奴隷たち

は、紙一重隔てているだけである。もしもアフリカの黒人奴隷の職人頭が傲然と鞭をとり、苦しみ働く黒人奴隷を鞭打つ映画を見たことがある人が、それをこの『略論中国文壇』の大文章と比較してみるならば、会心の笑いを禁じえない。その一人と一群は、そのように相近く、しかしまたそのように異なる。この紙一重はまことにはっきりと分け隔てる。奴隷と奴才をはっきりと分ける。」

さらに、『漫与』（1933・9・27、『南腔北調集』）では次のように言う。

「生きた人間は、当然生き続けたいと思う。たとえ真正銘の奴隷であっても、やはり堪え忍んで生き続けようとする。しかし自分は奴隷であるとはっきり知っており、堪え忍び、不平をもち、あらがいつつ、一方で抜けだそうと『意図し』、脱却を実行する。たとえ一時は失敗し、手かせ足かせをつけるとしても、彼は単なる奴隷にすぎない。もしも奴隷の生活から『美』を捜しだし、讃嘆し、いつくしみ、陶醉するならば、それはまったくの永遠に回復することのない奴才である。奴群のなかにこの区別があるがゆえに、社会に平安と不安の区別をもたらせる。文学上では、麻醉と戦闘の違いをはっきりと表す。」

- <sup>11</sup> 前期における「聡明人和傻子和奴才〔賢人と馬鹿と奴隷〕」（1925・12・26、『野草』）が封建社会の体制（主人〈それと結託する賢人〉と従順な奴隷）と改革者（馬鹿）の関係を諷刺したものとするれば、後期の奴隷と奴才の関係は被支配階級のなかの先鋭化した矛盾（戦闘と麻醉）を表現すると思われる。

- <sup>12</sup> 魯迅は1933年2月13日付け程琪英宛て書簡（『魯迅全集』第12巻）で次のように言う。「私は『呐喊』出版後に、『彷徨』を一冊、二三冊の小冊子、数冊の雑感集を出したことがあります、三四日の内に、数冊お送りします。そのほかに翻訳もありますが、言うにたりません。現在著作は大変少なく、そのうえ発表の自由を奪われました、一昨年〔実際には1930年自由運動大同盟のときのことを指す〕、私の指名手配が出ましたが、しかし私は捕まっていません。」

また、魯迅は1933年11月5日付け姚克宛て書簡（『魯迅全集』第12巻）で次のように言う。

「私たちは常のように、『自由談』に依然投稿します。しかししばしば筆名を変えなければなりません。もし印刷しようとすれば、また一冊できることとなります。しかしおそらく出版するところがありません。もしも削除改変する必要があるのならば、自分でも願いません、それで置いておくしかありません。小説を新作することはできません。これはべつに時間がないのではなくて、むしろ腕がないのです。多年社会と隔絶し、自分が渦の中心にいないので、感ずるところはどうしても浅薄であるのをまぬがれませんし、書いても良いものになるはずがありません。」

また、1932年11月7日付け山本初枝宛て書簡（原文は日本語、『魯迅全集』第14巻）には次のように言う。

「此頃、何か書かうと思って居りますが何も書けません。政府と其の犬達に缶詰にされて社会との接触は殆んど出来ませなんだ、」

また、1933年7月11日付け山本初枝宛て書簡（原文は日本語、『魯迅全集』第14巻）には次のように言う。

「私は今には支那を去る事が出来ません。暗殺で人を驚かせる事が出来るとますます暗

殺者を増長します。彼らも私は青島へ逃げて仕舞ったとの謠言を拵えて居ます。けれども私は上海に居なければなりません、そうして悪口を書きます。そうして印刷をします。仕舞には遂にどちが滅亡するかを試験して見ましょう。」

<sup>13</sup> 魯迅は、「門外文談」(『自由談』(1934・8・24～9・10、『申報』初載、『且介亭雜文』)で次のように言う。

「歴史の指し示すところによれば、およそ改革は、最初、必ず自覚のある知識人の任務であった。しかしこれらの知識人には、必ず研究し、思索ができ、決断があり、しかも毅力がなければならなかった。彼は権力を用いるが、人を騙さず、彼はうまく導くが、決して迎合しない。彼は自分を軽く見て、みんなの役者だとは思わず、また他人を軽く見て自分の手下とは見なさない。彼はただ大衆の中の一人である、私が思うにこうしてこそ大衆の事業を成すことができる。」

「筋骨と背骨」である中国人の中には、こうした種類の、大衆のなかの一人である知識人も含まれていたと思われる。

<sup>14</sup> 「筋骨と背骨」の中国人像は、初期の諸論文に表現された、愚民と対比される「精神界の戦士」(『摩羅詩力説』、第九章)、民衆の上に立つ指導者とは異なる。それは、魯迅が中期において「個人的無治主義」から脱却し、後期においてマルクス主義文芸理論の習得後に現れる、また当時の中国の現実の中で新たに認識した、民衆の中で、民衆とともに、社会の車輪を推し進めようとするような、「筋骨と背骨」の中国人像であったと思われる。